

② 人間性の反省

cf. [1]の登場… 16・17C、仏

新旧の価値観がせめぎ合う移行期が背景
ex. プロテスタント vs カトリック
科学的世界観 vs 宗教的世界観
人間の本性を冷静に観察する「道德家」=モラリストが活躍

(1) [2] (16C、仏)

- 1 仏国内の悲惨な宗教戦争の時代
→ 読書と内省から、『随想録 ([3])』を著す
- 2 「私は何を知っているか ([4])」
 - a 人間を深く省察
… 偏見や独断を排し、寛容の精神を重視
 - b 懐疑主義 (not 判断停止 but 真理を求め続ける態度)
… 理性は不完全なので、流動・変化する真理を得ることはできない

(2) [5] (17C、仏 哲・数・物理学者、宗教家)

- 1 決定的回心 (32歳)
→ 修道院に入り、『[6] (瞑想録)』を著す
- 2 [7]学の精神 (A) と [8]な精神 (B)
A … 数学の推論と論証 (理性中心で論理的)
B … 微妙な心の動きを直感 (心情中心で直感的)
- 3 「人間は考える [9]である」
 - a 自分の悲惨さを知ること (考える) = 偉大
 - c 「空間によって宇宙は私を包むが、考えることで私が宇宙を包む」
 - b 弱く死すべき存在 (しかも、そのことを知っている) = 悲惨
- 4 人間の在り方… [10]者として弱く不安定
ex. 偉大と悲惨、天使と獣の間
- 5 キリスト者として強く安定
∴ 2のBにより、[11]=キリスト (神の偉大さと人間の悲惨さの体现者) を知る
cf. 「自分の悲惨を知らずに神を知ることは高慢を生み、
神を知らずに悲惨を知ることは絶望を生む」

MEMO etc.